

弘末雅士

『東南アジアの港市世界』

——地域社会の形成と世界秩序』

岩波書店, 2004

東南アジア世界は二つの側面を持っている。一方でこの地域は東西海上交易の要衝に位置し、外部世界から多様な人々を惹きつけてきた。また一方で、熱帯地方の豊かな自然環境に恵まれ、貴重な交易商品を産する空間が内陸部に広がっている。このような東南アジアの「内」と「外」の側面を結びつけたのが港市である。港市には外部世界から商人や旅行者らが訪れ、国際色豊かな「文明世界」が形成された。これに対し内陸部については、港市を訪れた外来者たちは、自然との境界が曖昧な野蛮な人々が住む「非文明世界」が存在していたと伝えている。本書は、東南アジアの「内」と「外」とを仲介する港市支配者の役割を中心に15世紀から18世紀における外来者・港市・後背地の関係を提示する。さらにそれを踏まえ、近代になりヨーロッパによる植民地支配が進展していく過程で、三者の関係性や仲介者の役割がいかに変容していったのかが論じられる。

港市国家論

アンソニー・リード (Anthony Reid) によれば、15 世紀から 17 世紀にかけての東南アジアは「交易の時代」(Age of Commerce) と呼べる景気拡大の時代を迎えた。リードは当初、交易の時代は 17 世紀末に終わったと論じたが、彼自身のもを含むその後の研究によりこの見解は見直された。東南アジアにおける交易活動は、対中国貿易の拡大などを背景に 18 世紀においても活発であったことが明らかにされている。

国際交易活動の活性化のもと、東南アジア海域世界では数多くの港市が隆盛した。その代表的なものとして、北スマトラのパサイやアチエ、マレー半島のムラカ (マラッカ) やジョホール、ジャワのバンテンやドゥマク、大陸部のアユタヤやペグーなどがあげられる。16 世紀になるとヨーロッパ勢力が東南アジアに進出するが、彼らが拠点として築いたバタヴィアやマニラなども港市であった。

この港市における交易活動と不可分に結びついて成立した政治形態のことを「港市国家 (港市政体)」(port-polity) と呼んだのが J・カティリタンビー・ウェルズ (Jeyamalar Kathirithamby-Wells) らである。港市支配者は、外部世界との交易を介してもたらされた富や文化を独占的に所有し、それを臣下に再配分することで経済的影響力と政治的権威を強化した。港市国家についての研究は、その類型論、海域ネットワーク、交易ルートの変遷などと関連して進められてきた。

これに対する本書の特徴は、港市とその後背地との関係に着目した点にある。本書の著者は元々、北スマトラの内陸社会を専門としていた。大半の港市は、交易商品や食糧を産出する後背地を内陸部に有していた。したがって、港市支配者は、外部世界だけでなく、後背地の生産者とも緊密な関係を構築する必要があった。本書は、後背地の住民に関する「奇習」の風聞や東南アジアに伝わる王統記の記述を検討し、港市支配者の「内」と「外」に対する「顔の使い分け」を明らかにしている。

外来者・港市・後背地の関係

本書によれば、15世紀から18世紀の東南アジア海域世界では、外来者・港市・後背地の間に次のような関係が構築されていた。

港市支配者は、他の港市と競合しながらより多くの外来商人を集めようとした。そのため港市には、多様な地域の出身者が集う外部に開かれた空間が形成された。そのような空間を統合するために、港市支配者は「世界秩序」を重視した。世界秩序とは、イスラーム、上座仏教、キリスト教、さらには中華世界との関係といったもののことである。港市支配者は「正統」な世界秩序を求めたが、さまざまな外来者を統合する必要性から他の世界秩序にも寛容な態度をとり、その複数との結びつきを主張する場合もあった。世界秩序との結びつきを示すうえで、港市支配者が中国の皇帝やアレクサンダー大王などと婚姻・血縁関係にあると伝えた王統記も重要な役割を果たした。さらに、港市に長期滞在する外来者と現地住民との混血者も、外部世界との仲介者としての役割を担った。

港市支配者の存立基盤は、外来者と内陸部の後背地を仲介することにある。そのため、外来者が後背地の住民と直接接触することは望ましくなかった。後背地の住民にとっても、外来者は病気を持ち込んだり人さらいをしたりする危険な存在であった。このような状況を背景に、後背地の住民の「奇習」についての風聞が流布した。その典型的な例が、彼らが「人喰い」であるとする語りである。港市でそのような風聞を耳にした外来者は危険な内陸部に行こうとせず、安全な滞在を保障してくれる港市支配者を仲介した取引を選んだ。外来者には、港市支配者が「野蛮」な後背地をも統治する「超人」と映り、その「超人間性」は交易活動の隆盛によって王権が強化されるとさらに増大した。

それでは、港市と後背地はどのような関係を築いていたのであろうか。ここで重要なのが港市支配者による「顔の使い分け」である。国際交易が活性化すると港市の影響力は後背地にも及ぶようになったが、港市は食糧

や交易商品を後背地に依存していた。後背地では、交易商品を生産・搬出しながら自らの食糧生産活動を保障できる体制が構築されたため、そこには農耕を司る権威が台頭した。港市支配者はそのような王権を尊重し、後背地の住民に世界秩序を押しつけようとしなかった。彼らは王統記の中で自分たちの出自を内陸部の権威と結びつけるとともに、自分たちが自然に影響を及ぼし彼らの生産活動を保障する力を持っていることを後背地の生産者に示した。

他方の後背地の王権に関する神話の中では、彼らの農業空間がその地域の始まりであり、港市支配者たちはその地から移り住んだ人々の子孫として描かれた。すなわち、後背地住民は内陸部の農耕を司る権威を中心に据え、自分たちこそがその地域の「土着民」であることを主張しながら、彼らの側でも港市支配者を血縁者と位置づけたのである。後背地の王権が王統記の中で港市支配者と血縁関係を主張する現象は、港市支配者がオランダ人の場合においてさえみられた。

近代における変容

以上のような外来者・港市・後背地の関係や東南アジアにおける仲介者の在り方は、19世紀以降になりヨーロッパ人による植民地支配が本格化していく中で変容していくことになる。ここでは、著者の専門であるインドネシアの事例が中心的に取り上げられている。

19世紀前半、パドリ戦争やジャワ戦争の結果、西スマトラやジャワ島がオランダによる植民地支配下に置かれていった。ただし、当初オランダは、地域社会の既存の有力者を取り込む間接統治を実施した。これらの人々がヨーロッパ人支配者を地域社会と結ぶ仲介者の役割を担ったことで、地域社会はヨーロッパ人にとって必ずしも統治しやすいものとはならなかった。しかし、19世紀後半にオランダによる植民地政策が直接統治へと転換すると、現地人有力者は無力化されていった。さらに、20世紀

前半までの植民地体制の確立の過程で、現地人向けの学校制度とそれに基づく官僚制度が導入された。統治の効率化のため現地人官吏が既存の現地人有力者の上位に置かれ、後者はヨーロッパ人支配者と地域社会とを仲介する役割を失った。また、植民地体制の中で後背地は特定の輸出用第一次製品の生産地として位置づけられ、食糧が必要な場合は他の地域から輸入するようになった。後背地の豊穡を司る権威は存在意義を低下させ、港市と後背地の関係性が崩壊したため「人喰い」など内陸部の「奇習」の風聞も語られなくなった。

しかし本書は、植民地体制下においても外部世界と地域社会とを結ぶ仲介者がいなくなってしまうわけではなかったと主張する。オランダ植民地政庁は多様な地域の出身の人々を人種的観点から分類し、法的に差異を設けた。その不平等を真っ先に感じたのが、ヨーロッパ人と地域社会を仲介してきた中国系やアラブ系の「外来東洋人」や欧亜混血者であった。彼らの間からそのような不平等の撤廃を求める動きが起こり、そこから植民地支配に対する対抗原理が構築され、現地住民による反植民地主義運動の端緒となった。長期滞在者や混血者は地域社会を「近代的な社会」に結びつける役割を果たしたのである。

さらに、オランダ植民地政庁は反植民地主義運動を抑えるために、結局は地域社会の仲介者に頼らざるをえなかった。植民地政庁は、現地人官吏やかつての現地人有力者を用いて反植民地運動についての情報を得ようとした。現地人仲介者たちは、植民地政庁と反植民地主義運動の参加者との間で情報を操作できる立場になった。現地人仲介者は常に植民地支配に協力したわけではなく、反植民地運動を支援して伝統的権威の回復を図ったり、地域社会の負担軽減や自治拡大を目指したりしたこともあったのである。

仲介者による「顔の使い分け」

東南アジアは、その地理的な条件から外部世界からもたらされた影響に常にさらされてきた。植民地支配期には、この地域の歴史は独自の文明を生み出さず外部世界の文明を受動的に受容してきたものとして描かれた。しかし東南アジア諸国の独立達成後になると、それぞれの国が持ってきた自律性を強調する歴史記述がなされるようになっていった。さらに現在では、外部世界からの影響の重要性は認めつつ、その影響を東南アジア地域社会が主体的・選択的に受容してきた点が重視されている。

本書で論じられた仲介者による「内」と「外」に対する「顔の使い分け」という視点は、東南アジア地域社会の自律性と外部世界からの影響の受容という問題を複合的に理解するうえで有効である。それは、前近代の港市を論じるのに限ったことではない。例えば、本書で取り上げられている植民地体制下の現地人官吏や現地人有力者の役割は、支配する側とされる側という二分法を超えた議論の発展に資するものである。植民地支配への関与ゆえに彼らが注目されることは現在でもまれであり、さらなる検討の余地が残されている。

また、東南アジア社会では、本書で扱われている以外にも多様な外来系住民が活躍してきた。これらの人々は、近代国家の中では、社会の周縁に暮らすマイノリティと見なされがちである。しかし、彼らを東南アジアの「内」と「外」とを結ぶ仲介者と捉えなおすことによって、彼らの住む地域社会を広域的な文脈の中で論じることが可能になるであろう。

参考・関連文献

- アンソニー・リード、太田淳ほか（訳）、2021、『世界史のなかの東南アジア（上・下）』名古屋大学出版会（原著：Anthony Reid、2015、*A History of Southeast Asia: Critical Crossroads*、Malden: Wiley-Blackwell.）
- Kathirithamby-Wells, J. and John Villiers eds. 1990. *The Southeast Asian Port and Polity: Rise and Demise*. Singapore: Singapore University Press.

- Reid, Anthony. 1988. *Southeast Asia in the Age of Commerce, 1450–1680, Vol. 1: The Lands below the Winds*. New Haven: Yale University Press.
- . 1993. *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680, Vol. 2: Expansion and Crisis*. New Haven: Yale University Press.

❖本書の著者紹介（弘末雅士）

公益財団法人東洋文庫研究員。専門は海域東南アジア史。オーストラリア国立大学大学院博士課程修了（Ph.D.）。主な著作として、『東南アジアの建国神話』、『人喰いの社会史—カンニバリズムの語りと異文化共存』、『海と陸の織りなす世界史—港市と内陸社会』（編著）がある。

❖執筆者紹介（山口元樹）

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科准教授。専門はインドネシア近現代史、東南アジアと中東アラブ地域との関係史。これまでに感銘を受けた本は本書の他に、家島彦一、1993、『海が創る文明—インド洋海域世界の歴史』朝日新聞社。